
Another World

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another World

【Zコード】

Z2528BA

【作者名】

アキ

【あらすじ】

全校高校弓道大会個人戦三連覇の懸つた大舞台の最後の一射で神崎怜は異世界に召喚されてしまう。召喚された世界で怜はどう生きていいくのか。処女作です。いろいろ至らないところもあると思いますが寛大な心でお読みください。作者は好きなweb小説の影響を多大に受けている可能性がございます。あきらかに他作品の盗作と思われるところがありましたら即刻言つてください。作者がその部分をまずいと思えば改稿いたします。

序章 神崎怜

『」を構えて矢を番える、弦を引き絞り矢を放つ。

タンッ・・・

「凄すぎじゃない。」

「全国三連覇が懸つた一射目で中心かよ・・・」

そう、ここはインターハイ弓道大会個人の部の決勝の舞台。神崎怜はその三連覇の懸つた舞台で全く緊張せずに弓を引いていた。

タンッ・・・ タンッ・・・

怜は全く同じペースで的を射ていく。

観客は怜の射に魅せられて息をするのも忘れそ�だ。

タンッ・・・

「次当てたら三連覇よ・・・」

観客が注目する中、怜が最後の射に入り始めたとき

会場に異変が訪れた。

怜の足元に魔方陣が描かれて光りだす。

観客は呆然としてその光景を見ている。

怜も足元から光が溢れていることには気づいたが射に入り始めた以上まるで意に介さない。

そして、怜が最後の一射を放とうとしたその瞬間、強烈な光に会場は包まれた。

数十秒ほどして皆の目が見えるよくなつたときには、

会場に神崎怜の姿はなかつた。

序章 神崎怜（後書き）

読んでくださつてありがとうございます。処女作で拙い表現等あると思いますが、寛大な心で見守つてくれると嬉しいです。毎回見直してから投稿するつもりではありますが誤字脱字等を発見されたら教えていただけたと幸いです。

序章 クリス・バルディア

「殿下！困ります！今日の召喚の儀には必ず出席してくださいと前々から申し上げていたではありませんか！」

「だからそれには俺も前々から出ないと言つていただろう。大体俺は王位を継ぐ気はないし、そもそも召喚の儀は気に入らないんだ。」

「殿下、私にはそれを言つても構いませんが絶対他の人に聞かれないようにしてくださいね。最悪不敬罪で処刑されますよ。」

「わかつていいさ。そもそも王宮内で信用して話をしている相手なんてアハト、お前くらいだ。」

「はあ・・・。分りましたよ、とりあえず今日は償還の儀に出てください。今まで言つてませんでしたが、実はコウラ様が“視た”らしいのです。」

「バアさんの星視と関係があるのか。どうりでいつにもましてお前が出るよつこ言つわけだ。仕方ない、今すぐ行けばギリギリ間に合うな。」

そう言つて俺はアハトを従えて謁見の間へと向かつ。

「遅いぞクリス」

「遅れてすみません。父上」

「まあいい、もうじき準備も終わる。後ろで待つてろ。」

そう言われて俺はこのバルディア帝国の王であり俺の父であるガスト・バルディア王の後へと移動した。

謁見の間には他に騎士団長であるコビタ・アルメノスと騎士団の上位騎士達、魔導師団長であり今回の召喚の儀を行うサハナ・ルシエと魔導師団の上位魔導師達がいた。

そこでふと疑問に思ったので父に聞いてみる。

「キーはいのですか？」

「第一王位継承者である貴様がいるのだから問題ない。」

そう言われて俺は内心で苦笑する。

（俺は王位継ぐ気はねえってのに・・・）

「陛下。 召喚の準備が整いました。」

そう思っていた間にどうやら召喚の儀の準備ができてたようだサハナが報告をしていた。

「召喚を始める。」

「ハッ。」

王が促しサハナが召喚魔法を紡ぎ始める。

魔法陣に光が満ちて召喚魔法が発動した

序章 クリス・バルティア（後書き）

読んでくださってありがとうございます。誤字脱字がございましたら言っていただけると嬉しいです。

一章 召喚（前書き）

地の文が辛いです。頭の中では漫画みたいな感じに展開されてしま
います・・・。

一章 召喚

（一章） 召喚

（これで最後・・・）

最後の一射を引き絞る。

直前、自身の足元が光りだした。

（なんだこれは。けど、関係ない。）

光が強くなつてくると怜は目を瞑つた。それでも体が覚えているので的の位置はわかる。

だから怜は気付かなかつた。矢を放つた瞬間には世界が変わつたことを。

「ぐ・・・」

王であるガストの呻き声が上がつた。

魔方陣に召喚された人物はなぜか弓を構えていて召喚されたときに矢を放つたのだ。

唖然である。謁見の間に集まつた全員が訳がわからない。

「陛下ー。」

いち早く立ち直つた騎士団長が王に駆け寄る。

「そのものを捕えろー。」

次に正気に戻った魔導師団長は召喚されたものを捕えるように指示する。

卷之三

その声で漸く騎士達は動き出す。

一
が
つ
！

召喚された者はさして抵抗することなく捕らえられた。

その光景をクリスはずつと傍観していた。

だがクリスがそんなことを考えてこの間にR&B音楽

牢へと連れて行かれてしまふ。

（さて、どうしたものかな。）（と、第一皇子の方も演じないとな）
「サハナ、すぐに父上の治療にあたれ、誰か一人は治療班長を念の
ため呼びに行け、ヨビタは地下牢の監視体制を整えろ。」

を立てるか。）

「くそつ！なんだお前らー放しやがれー！」

「いぬわー。」Jの反逆者が！」「

(反逆者だと!? 訳わからんねえ!) と呟つてんじやねえよ!」こういふ。

そんなやり取りをしている間に、地下へと辿り着き、猛烈に牢に入れられた。

「入つてゐ。明日には不敬罪で公開処刑が待つてゐるだらうよ。」

「そう言い残して騎士は出て行つた。おそらくやつきの部屋へ戻るのだろう。」

「くそつ！なんなんだこゝは！不敬罪で処刑！？冗談じやない！俺が何したってんだ！」

ガニッ！…！

怜は格子を蹴りつけるがビクともしない。王城の地下牢なのだから当然である。そのことで少し冷静になつたのか現状を考える余裕ができた。

（とりあえずこゝがインハイの会場じゃないのは確定だ。だとするとこゝはどこだ。日本語を話していたけど日本でこんなことがされるはずないし何より『不敬罪』なんて法律は無かつたはずだ。だとしたらどこだ…。くそつ。牢屋なんかにいたら情報が少なすぎてわからねえ。）

怜はとりあえず現状の把握を試みるがやはり牢屋の中からだと情報がなき過ぎてとてもじゃないが把握はできない。

（とりあえずわかっていることは

- 1・こゝは日本ではない。
- 2・俺はこのままだと処刑される。

（これだけか…。）

「くそつ！」

そう言って格子を蹴りつける。無駄だと分かっていても怜はやらずにはいられない。

そんな怜に誰かが声をかけてきた。

「おーおー、荒れてるねえ。」

「誰だ？」

「クリス・バルディナ。この国の王子だよ、一応ね。」

「で、その王子様が何しに来たんだ？」

「相談だよ。俺と一緒にこの国から逃げないか？」

一章 召喚（後書き）

読んでいただきありがとうございました。誤字脱字その他表現のおかしいところ等があれば教えてくれればうれしいです

一章 逃亡（前書き）

開いてください。ありがとうございました。おまか。

一章 逃亡

「この国から逃げるだと? そんなこと出来るのか?」

「もちろん。俺はこの城の抜け道を全部知っているし、この城から抜け出した後のこともちゃんと考えているさ。」

「・・・」

（どうする、乗るか? 俺を助けることでここにあるメリットは何だ? 俺は近日中に処刑されるらしいから外に連れて出して殺すことこの意味ではない。だとしたら本当に俺を助けることが目的か?）

「あー、悩んでるとこひの悪いけど、処刑が明日に決まったから逃げるなら今夜しかチャンスが無いんだ。逃げるにもある程度準備が必要だから今すぐ決めてくれないかな。」

「逃げる。」

（ここで捕まつても明日殺されるんだ。なら罷だろ? と抜け出したほうがマシだ。）

「いい答えだ。」

怜のその答にクリスは顔を綻ばせた。

「なら今夜また来る。いつでも逃げれるよう準備しておいてくれ。」

「準備なんてストレッチくらいしか出来ねえよ。」

怜の返答にクリスはクソクツと歎を鳴らす。

「『』。
「ん?」

「俺の弓はどうした。」

「俺が回収した。逃げる時に持つてきてやるよ。」

そう言い残してクリスは上階へと去つて行った。

（かなり警戒されてたな。まあいきなり異世界に連れてこられた牢の中だ、無理もないか。）

クリスは一人苦笑するも足取りは軽い。

（いよいよだ。よつやくこの国から出ていく時が来た。）

「殿下。」

そんなことを考えていたクリスに騎士団長が声をかけてきた。

「奴の様子はどうでしたか？」

「だんまりだ。未だに状況が把握できていよいよだ。」

「そうですか。殿下は奴のことなどいつも思いますか？」

「どう、とは？」

「私は奴が弓を持つている間はただならぬ気配を感じました。しかし、我々が捕らえた時にはその気配がまるでなかつたのです。殿下は感じませんでしたか？」

「俺は美しいと思ったな。それより地下牢の見張りの編成はどうだ

？」

「？問題ありません。」

話題を変えたクリスに疑問を思つもコビタは答えた。

（さて、逃亡生活の始まりとしようか。）

準備を終えたクリスは地下へと向かう。

地下牢の前には二人の見張りがいる。そこへ近づいたクリスはおもむろに声をかけた。

「奴の様子はどうだ？」

「ツ、殿下。はい、最後に見た時はなにやら体操をしているようでした。殿下はなぜこちらに？それにその荷物は？」

「ん？ああ、そろそろこの城から抜け出そうと思つてな。」

「はつ？ガツ」

「殿下つ！なに、ぐふお。」

クリスの発言に驚いている間にクリスは一人の見張りを氣絶させる。見張りから鍵を盗り牢の中へと入つていく。

「お待たせ。何してんだ？」

のんびりしている暇はないのだが聞かずにはいられなかつた。怜はヨガをしていた。

「準備運動だ。それより急がなくていいのか。」

「つ！ホラ、『』だ。行くぞ」

「さんきゅ。」

礼を言つて『』を受け取ると怜は立ち上がりつてクリスに尋ねた。

「抜け道まで行くのに見つからずに行けるのか？」

「大丈夫だ。地下牢の中に抜け道があるからな。」

その答を聞いて怜は啞然として訊いた。

「なんで地下牢の中に抜け道があるんだよ・・・」

「確かに侵略されて王族が捕まつた時にどうとか聞いたな。」

そう言いながらクリスは石壁を調べている。と、探し物を見つけてようやく石壁の一ヶ所を押し込むと牢の隅の壁がずれて階段が出てくる。

「アーラー

（地下牢にこんなもんつくんなよ・・・）

と、怜が呆れているのをよそにクリスは階段を下っていく。

「おい、地下なのになんで階段下つてんだよ。」

「ここの城が高台にあるからだよ。この階段で麓まで降りる。それよりこれ着とけ。お前の服装は目立つ。」

そう言つてクリスはロープを投げて寄こした。怜は袴の上からロープを着た。

「やつと外か。」

「俺もあんな長いとは思わなかつた・・・」

かれこれ2時間かけて地道を歩いた一人は漸く外に出た。外は満天の星空でどこか幻想的な風景だと怜は感じた。ふと後ろを見ると高い城壁がある。

「よし、とりあえず俺の協力者のところまで走るぞ。」

そう言ってクリスは走りだす。怜もクリスについて走り出すがふと違和感を感じた。

2時間歩きっぱなしだったにもかかわらず全く疲れていないのだ。
(なんだ?俺はそんなに体力あるほうじゃないのになんで2時間も歩いた後に走っているのに全然疲労を感じないんだ?)

疑問に思いながらも今考へても答えの出るものでもないのでおとなしくクリスに付き従っていく。

一章 逃亡（後書き）

誤字脱字その他表現のおかしなところ等があれば言つていただければ
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2528ba/>

Another World

2012年1月8日19時52分発行